

NPO 法人オアシス社員の皆様方へ

令和4年新年に寄せて — 「どうするオアシス」の先に

謹賀新年 「お陰、お陰で生かされて、七十路も半ばとなりけり。閻魔大王生きるエネルギーあるかと問うに、「ある」「ある」「ある」と3度（構想・期待・時間）答える己かな。私こと、恒例の長文年賀状冒頭の一節であります。まだまだ、しぶとく元気に生き続けようとの決意表明です。

振り返って、カンボジアでの支援活動が2年間停止している状況が続いています。だからこそ、これまでの活動を丁寧に振り返ることができた昨年一年であったとも言えます。その過程で私の脳裏を捉えて離さない言葉があります。それは「お陰」。

カンボジアでの13年間の支援活動のなか、現地の人たちはもちろんのこと、とりわけ社員の皆様のご尽力、さらに支援者の皆様方の浄財支援に加え幾多の応援メッセージ（別紙参照）の数々があったことを思い返さずにはられません。『お陰』が私たちの活動を支える最高のエネルギーとなりました。

話が変わりますが、昨夏本法人監事の仲田さんの紹介で令和5年NHK大河ドラマ「どうする家康」の制作担当ディレクターK氏との面会の機会を得ました。さらに彼には、新年早々脚本構成上の案件として上ノ郷城跡を案内したところです。「どうする家康」VS「どうする長照（上ノ郷城4代目城主）」の狭間での攻防がドラマ化への俎上に上りそうです。

己の命や家督を賭しての彼らの「どうする」とは比較の対象にはなり得ませんが、今私たちには「どうするオアシス」の命題が突きつけられています。もちろん皆さん方の人生あつてのオアシスであります。まずは、自身の自己実現に向けてオアシスの活動を上手にアレンジしていただくこと、特に本活動に係わる知見・人脈を活かしより多彩な日常をつくり上げていくことが、本命題を解決していく上での重要な筋道であると考えます。従来の活動経緯に囚われることなく、それぞれの個性が反映された活動を創造していただければと考えます。

本年正月、次男が西浦半島から撮影した富士山の写真に見入りました。濃緑色の石巻山塊と春陽煌めく紺碧の空との狭間に白球が投じられたように、純白無垢の富士の鮮やかさに吸い込まれました。一年に数度しか見ることができないと言われている西浦半島からの富士、「これは春から見通しが、縁起がいい！」。何かしら、エネルギーが沸き立つ元旦でした。

「皆様方の本年のますますのご健勝とご活躍をご祈念いたします。」

足立泰敏

【当面の予定】（コロナ感染拡大につき、参加につきましてはくれぐれもご留意ください。）

※令和4年新年会 コロナ禍感染拡大につき中止とします。

1/23（日）13:30～ 山本邸 定例役員会 ※寄贈品整理を実施します。

2/13（日）14:00～ （未定） 定例役員会 ※広報オアシス43号を発行します。

2021.12/11 オアシス市民交流会に参加して〔意見・感想〕

一般参会者 20代 N.Sさん

カンボジアの子どもたちが生き生きと学校生活を送るために、オアシスの方々が手厚い教育支援を行っていることが良くわかりました。「協育」「競育」「響育」「共育」のどの観点も、未来を担うカンボジアの子どもにとっていい影響を与えるものだと強く感じました。特に、「響育」で行われた実践に興味を持ちました。音楽の授業で行われた、発表会の成功を目標に互いに楽器を教え合って伸ばしていく取り組みは、実力だけでなく協調性や仲間意識が深まると感じました。環境教育では、今まで地域の家や道路に捨てられたゴミに関心が無かった子どもたちが、環境に良くないことを理解した上で地域の掃除活動を自発的に行うようになった。これは、環境問題を自分ごとと捉え、自分たちでやれることをする姿勢が育つ、大変有効な取り組みだと感じました。

パネラー 50代 S.Mさん

市民交流会のパネラーとして参加しました。オアシスとバイヨン中学校が協力してつくりあげたカンボジア流の運動会。そこで見せた、生徒たちの生き生きとした表情が印象に残りました。

学校現場では、働き方改革や感染症対策のため、生徒たちが競い合ったり、共につくったりする体育大会などの行事を、縮小や廃止する方向にあります。しかし、カンボジアでの成果を聞き、今後の学校経営のあり方について考えさせられました。

カンボジアで教育ボランティア活動を13年間継続されてきた背景には、大変な苦勞があったと思います。しかし、オアシスのみなさんは、口々に「楽しいことばかりで、苦勞はありませんでした。」と質問に答えてみえました。その姿は充実感に溢れていて、うらやましく感じました。

一般参会者 50代 M.Kさん

自分のもっている能力を、人々を喜ばすためにつかうことで、自分の喜びとする生き方。大きな志を抱き、頭の中で考えたことを現地の人々と共に汗を流しながら、自分の手と足をつかって地道に実行していく。心に灯をともし続け、労を厭わない。むしろ、楽しみながら生きる元氣をもらっているという。その活動は、支援を受ける側とする側といった対峙する関係でない。自分の身を下ろすことで相手と同じ目線に立ち、本当に欲しているものは何か。謙虚な姿勢で臨むことが信頼を生み、相互に期待し、期待される存在となって、現在も成長し続ける。人と人との交流の中で育まれた「協育」、「競育」、「響育」、「共育」の4つの教育。「学校づくり」において国境はない。

この会に参加して、教育に対する考えを再構築するとともに、会員の方たちからエネルギーをいただいた。「共に学ぶ姿勢」を大切に、カンボジアの子どもたちのような輝く瞳を引き出せるよう、自分磨きに精進していきたい。